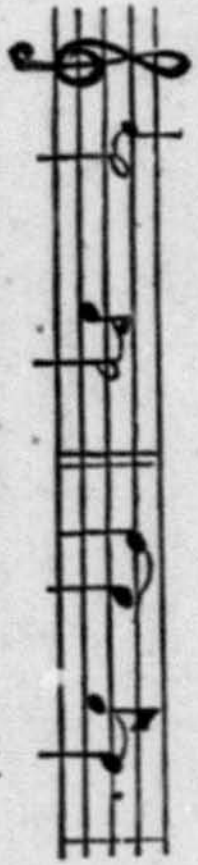
答　倚音とは某音符の前に小符の連結線によりて結合されたるものにして、其の音符と同一の拍子内に於て二音以上の飾裝音を發するものをいふ。而して之に二種あり。一つは主音の上音に於けるものにして、一つは主音の下音に於ける音よりなる。例へば。



（譜　略）　（譜　略）　（譜　略）

一、主音より其音長の二分の一を借るものと、四分の一を借るものとあり。

二、主音附點音符なるときは、其の三分の二を借る。

第百九問　碎音とは如何なる音なるか、其の書法及び奏法を問ふ。

答

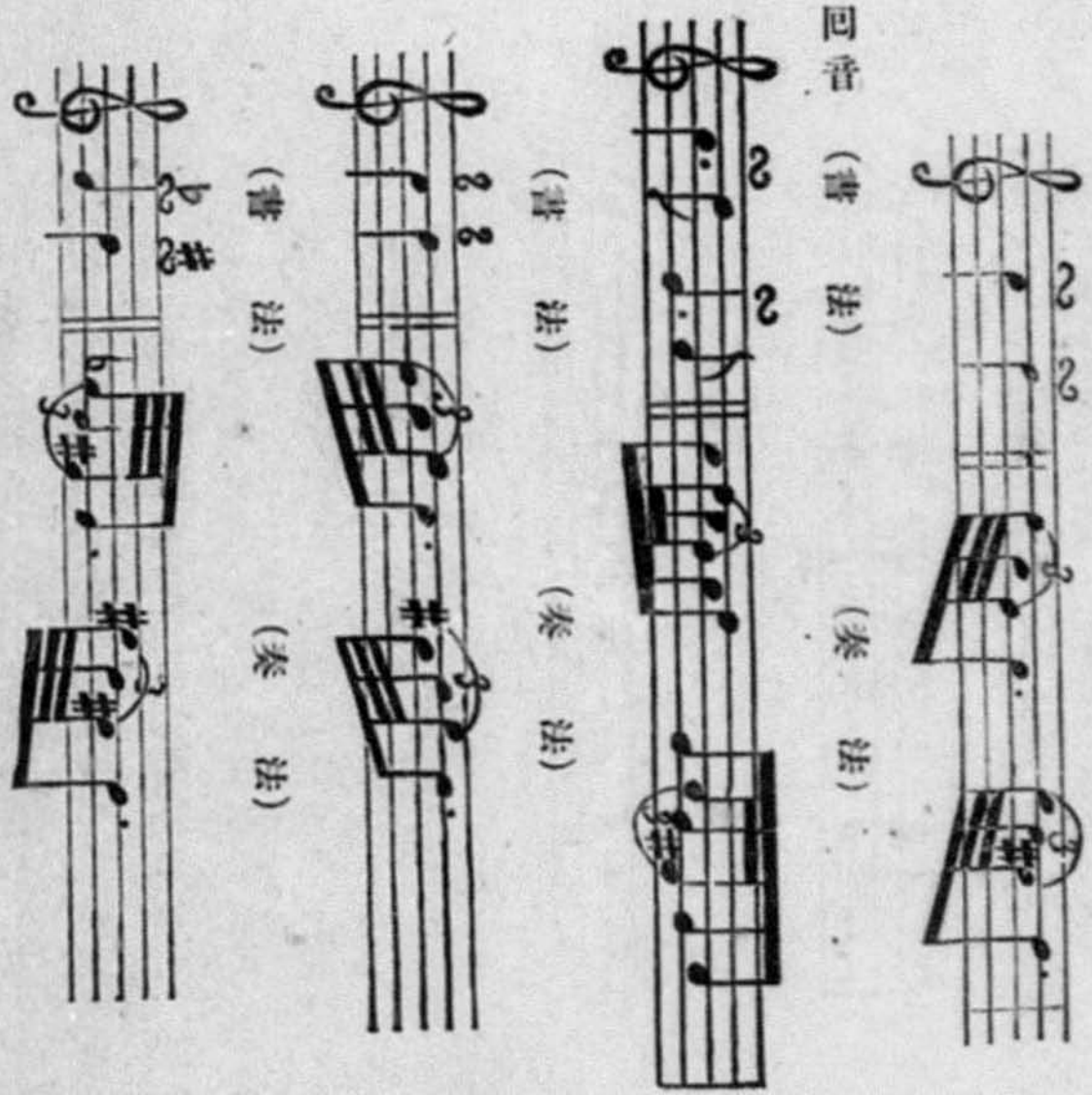


（譜　略）　（譜　略）

倚音の如き小符に斜線を施せるものにして、極めて短明に奏するものとす。

第百十問　回音とは如何なる音なるか。

答　回音とは普通譜上にS又はSなる記號を記し、以て他の音と之を區別す。即ち左の如し。



一、横Sは順回音といひ、主音の上一度

より下一度に至り主音にて止まるものなり。

二、竪Sは逆回音といひ、主音の下一度より上一度に至り主音にて止まるものなり。

三、主音附點音符なるときは、始めは主音を奏し、次に回音を奏するものなり。

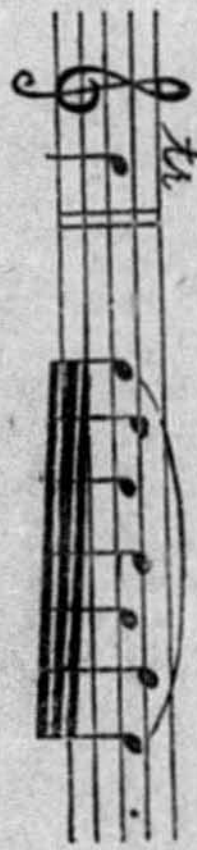
四　回音記號の上部に變化記號あるときは、何れも回音の始めの音に附するものとす。

第百十一問　顫音とは如何なる音なるか、書法及び奏法を問ふ。

答　TRの記號にして、主音と其の上一度の音とを瞬速交互に反覆するものなり。

一、主音と其の上一度の音とを反覆して、主音に止まるものあり。

二、主音と其の上一度の音とを反覆して、回音に止まるものあり。



（書法）　（奏法）

（書法）　（奏法）



第百十二問　漣音とは如何なる音なるか。書法及び其の奏法を問ふ。

答　Wの記號にして、主音の上或は下一度の音を瞬速に經て主音に止まるものなり。

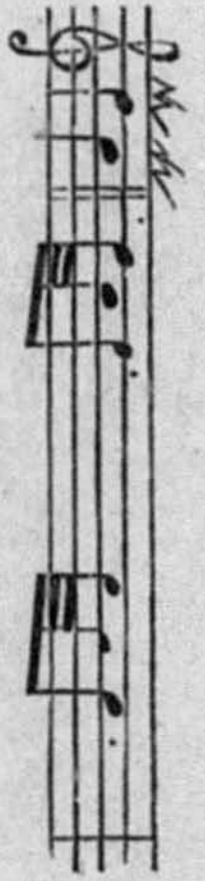
一、Wは順漣音といひ主音より上一度の音を經て、主音に止まるものなり。

二、Wの如く斜線を有せるものは逆漣音といひ、主音より下一度の音を經て主音に止まるものなり。

（書法）　（奏法）



（書法）　（奏法）



第百十三問　琶音とは如何なる音なるか。書法

及び奏法を問ふ。

答　音符の左側にある波線にして、或和絃の音を順次に神速に奏するものなり。和絃とは一の調和すべき諸音にして、和聲學上之を和絃といふ。

（譜　法）　（奏　法）



第百十四問　變種音階の調號を發見する簡單なる方法を示せ。

答　變種音階に於て最後の變は音階の第七度にあれば、其の上の音は、卽ち其の音階の主調音なり。變種音階に於て最後の變は音階の第四度にあれば、それより四度下りたる所を主調音とす。

第百十五問　音域とは如何。

答　器樂・聲樂の如何を問はず、人聲又は樂器にして其の發音し得べき高低の限界内を音域といふ。

第百十六問　洋琴の音域を問ふ。

答　普通使用の洋琴は七連八音を有するものにして、其の最低音(イ)は一秒時に

二十七餘の振動を有し、其の最高音(イ)は同時間に三千四百八十振動を有するものなり。

第百十七問　人聲の區域を問ふ。

答　人聲は男女の性により又年齢等により て自然高低の異同あれども、其の區域至つて狹小にして、僅かに二十三音度を領するに過ぎず。而して人聲を以て歌ひ得べき普通の限界内は、之を人聲の區域といふ。

人聲の區域は之を大別して、通常左の四種とす。

人聲
- 男
  - 低音部(下二點十二律(ヘ)より無點十二律のハに至る間の音を出す。)
  - 次中音部(下一點十二律(ヘ)より無點十二律トに至る間の音を出す。)
- 女
  - 中音部(下一點十二律(ヘ)より上一點十二律ハに至る間の音を出す。)
  - 高音部(無點十二律のハより上二點十二律トに至る間の音を出す。)

最高音部は婦人・童女の高聲にして、中音部は低聲に屬す。次中音部は男子(大

人)の高聲にして、低音部は低聲に屬す。又通例女聲は男聲よりも一八音(オクターブ)だけ高きを常とす。

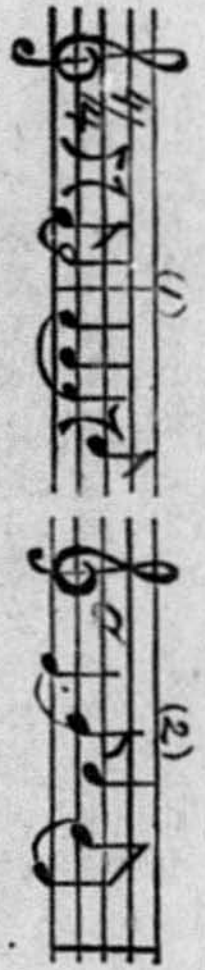
第百十八問　音符の上に小黑點を附したるものの●は如何なることを示すものなるか。且つ其の名稱を問ふ。

答　此の記號を附せられたる音符は、其の己の有する元來の拍子の半分の長さに減じて、短かく鮮明に奏唱すべきを示す。此の記號を星點音(ダツト)(圓點)といふ。

第百十九問　音符の上に垂點を附したるものの▼は如何なることを示すものなるか。且つ其の名稱を問ふ。

答　頓音(スタツカトー)といひ、此の記號を附したる音符は、其の己の有する拍子の四分の一の長さに減じて、極めて短く鮮明に奏唱すべきことを示す。(STACCATO(スタツカトー))

第百二十問



右二譜表中にある連結線は如何なることを示すものなるか、且つ其の名稱

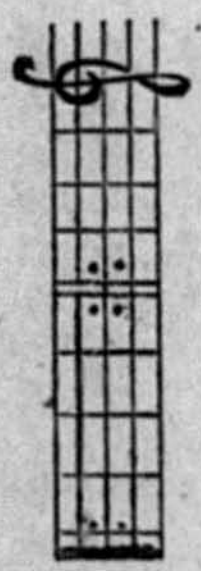
を問ふ。

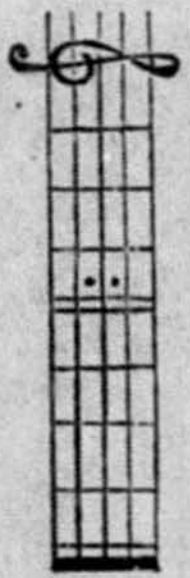
答　(1)に於ける同度上の二箇以上の音符を弧線にて連ねたるは之を帯(タイ)と云ひ、其のかけられたる諸音を軟滑に連續して奏唱すべきことを示す。(2)の如く異度上の二箇若くは二箇以上の音符を弧線にて連ねたるは、諸音間を軟滑に奏唱すべきを示すものにて、これを連(スラー)といふ。效用帯と同じ。

第百二十一問　反復記號(レピート)とは如何。其の種類を擧げて說明せよ。

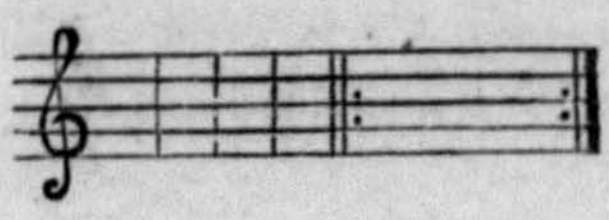
答　樂曲の一段落又は一部分が全く同一の曲節より成る時は、記譜上の便利によりて其の同一部分を繰返し、以て記載すべき小節を省略することあり。此の場合に用ふる諸記號を名づけて反復記號といふ。普通用ふる反復記號に三種あり。左の如し。

(一)

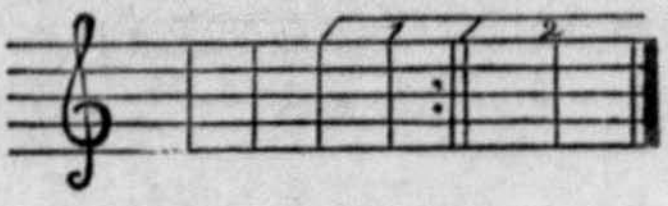




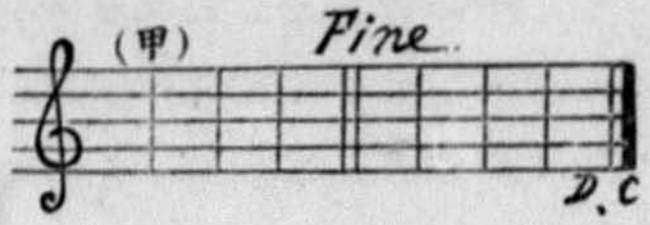
(一)

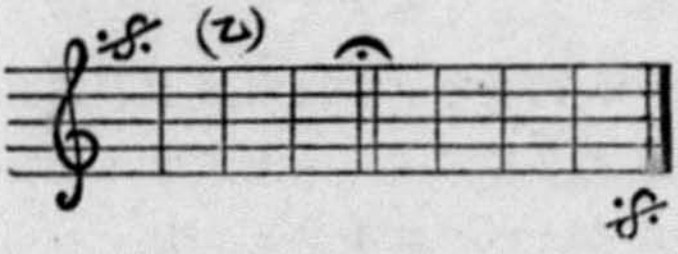


(二)



(三)





おのおのにD.Sなる文字を用ふることあり。それは「DAL SECNO」の略字にしてSなる符號の繰く返るべきところを表示するものなり。

(一) は同一の場所を全く反復する時の記載法なり。

(二) は樂曲の最終部分のみ異りて他の部分全く同一なる時に反復する記載法とす。

(三)　は樂曲の最後より最初又は其の中途に反覆し、同一の場所を全く終へずして、樂曲の中途に終結する時の記載法なり。

(甲)は外國語(DA.CA.PO)の略號にして、「最初に反す」との義なり。故に此の記號は只一箇のみを用ひて最初に反すものなれば、之を反始記號といふ。

(乙)𝄋は同じく外國語(ダルセンニヨ)と同義なる略記號にして、「記號に迄反す」との義なり。故に此の記號は必ず二箇を要し、今一箇記號の附せられたる所に反すものなれば之を連續といふ。

(FINE)と(•)は共に終結を告ぐることを示すものにして、(•はFERMATAと同義なる略記號なり。「フエルマタ」は又延長の義あり。

第百二十二問　譜表の上側に 8VA……の記號あるときは、如何なることを示すものなるか。

答　此の符號は譜表に記載せる音符よりも、猶八音だけ高く或は低く演奏すべ

きを表示す。而して其の符號の後にある點線は、八音高くすべき部分を示すものなり。

第百二十三問　譜表の上側に∨又は❜を添へたることあり。之は如何なることを示すか。

答　唱歌の際氣息をなすべき箇所を示すものなり。

第百二十四問　CHORUS（コーラス）とは如何。

答　「コーラス」とは合唱と譯す。此の字は元來最高音部・中音部・次中音部・低音部等の諸聲部を合唱する一隊といふ意義なり。

第百二十五問　〔R. H. と M. D.〕及び〔L. H. と M. G.〕は如何なることを示すか。之を說明せよ。

答　R.H若くはM.Dの何れかを低音部譜表の或音下に附記するときは、左の手を越えて右の手を使ひ、其の音を奏すべきを示す。これは有鍵樂器の譜に專用せらる。又L.H若くはM.Gを高音部譜表の或音の上に附記するときは、右の手を越えて左の手にて其の音を奏すべきを示すこと、前者の反對なり。

第百二十六問　運指用の記號を問ふ。

答　普通樂譜にて音符の側に(1)の記號あらば、此の音鍵を拇指にて壓すべきを示し、その他(2)は食指、(3)は中指、(4)は無名指、(5)は小指にて其の音鍵を壓すべきを示すものとす。之は有鍵樂器にて演奏すべき曲譜に最も多く散見する所にして、左右の兩手共に(1)は拇指、(2)は食指、(3)は中指といふ樣に適用することを得るものなり。又往々米國出版の樂譜には、拇指を×、食指を(1)、中指を(2)、無名指を(3)、小指を(4)にて表示せることあり。一音符に(2.1)の如き印あらば、先づ其の音鍵を食指にて壓へ、次の瞬時に鍵を壓へたるまゝ、拇指に讓りかへて奏すべきを示すなり。

第百二十七問　拍節機とは如何なるものをいふか、且つ其の用法を問ふ。

答　拍節機は樂曲の拍子の速度を定むるものにして、其の用法は指示竿に刻せらるゝ數字は一分時間に起る拍子の數を表したるものなれば、其の處に附著する眞鍮製の圓を、欲する所の數字

の上に置き、振子に一轉を與ふるとき、は、轉々其の速度を示すものなり。

第百二十八問　♩＝90、♩＝120、♩＝96 等の意義を問ふ。

答　上に記すものは樂曲中の二分音符若くは四分音符、四分附點音符の一分時に於ける速度の數を顯したるものにして、卽ち拍節機の數字を樂譜上の音符に示したるものなり。故に ♩＝90 とあるときは此の曲の二分音符は一分時に九十の速度を以て奏し、♩＝120 とあるときは四分音符は一分間に百二十の速度に奏し、♩.＝96 とあるときは此の曲の附點四分音符が一分時間に、九十六の割合を以て奏すべきことを示したるものなり。

第百二十九問　音程とは如何、且つ如何に之を數ふるか。

答　音程とは或音より他の音に至る間の距離を云ふ。之を計ふるには譜表上二音の中間に於ける線間の數（卽ち度）を以てす。

第百三十問　音程に協和、不協和の二あり、其の

別を問ふ。

答　協和音程とは同時に響く二音の調和最も良く耳覺に滿足なる快感を起さしむるものにして、不協和音程とは二音の調和不良なるものをいふ。

第百三十一問　協和音程は如何に之を區別するか。

答　協和音程は更に別ちて完全・不完全の二とす。

第百三十二問　完全協和音程に屬する諸音程を問ふ。

答　第四度・第五度・第八度これなり。

第百三十三問　不完全協和音程に屬する諸音程を問ふ。

答　第三度・第六度これなり。

第百三十四問　不協和音程に屬する音程を問ふ。

答　第二度・第七度これなり。

第百三十五問　全音階中に何箇の音程あるか。且つ其の名稱を擧げよ。

答　十四箇あり。長二度・短二度・長三度・短三度・完全四度・增又(大完全)四度・完全五度・減又(不完全)五度・長六度・短六度・長七度・

短七度、完全八度及び同度音程是なり。

第百三十六問　同度音程とは如何なる音程なるか。

答　同度音程は完全一度音程又は中性一度音程ともいふ。此の音程は同度にありて全く同じき音なれば、其の實音程とはいひがたけれども、和聲學上にては之を以て一箇の音程と看做す。假令ば(ハ)—(ハ)、(ホ)—(ホ)等の如し。

第百三十七問　長二度音程と短二度音程との差異點を述べよ。

答　長二度音程は二度に渉りて、全音一箇の距離を有するものなり。例へば(ハ)(ニ)、(ト)(イ)等の如し。短二度音程とは二度に渉りて半音一箇の距離を有するものなり。例へば(ホ)(ヘ)、(ロ)(ハ)等の如し。

第百三十八問　全音階上にある三度音程の二種につき說明せよ。

答　三度音程に長三度音程と短三度音程との二種あり。長三度音程とは三度に渉りて、全音二箇の距離を有するもの(ハ)(ホ)、(ト)(ロ)短三度音程は三度に渉りて全音一箇と半音一箇との距離を有す

ものなり。例へば(ホ)(ト)、(イ)(ハ)等の如し。

第百三十九問　完全四度音程は何れの處にあるか。

答　(ハ)より(ヘ)、(ニ)より(ト)、(ホ)より(イ)、(ト)より(ハ)の間にあり。

第百四十問　増(超過)大完全三連全音的)四度音程とは如何。

答　此の音程は四度に渉りて全音三箇の距離を有するものにして、(ヘ)より(ロ)に至る一箇あるのみ。

第百四十一問　完全五度音程は何れの所にあるか。

答　(ハ)(ト)、(ホ)(ロ)等なり。

第百四十二問　減五度音程とは如何之を説明せよ。

答　減第五度音程は一名不及第五度音程といひ、又不完全第五度音程ともいふ。此の音程は五度に渉りて二全音と半音二箇との距離を有するものなり。例へば(ロ)(ヘ)、(ロ)(ヘ)の如し。

第百四十三問　全音程に存する六度音程の二種を例をあげて説明せよ。

答　長六度と短六度との二種あり。長六度

は六度に渉りて、四全音と半音一箇との距離を有するものなり。短六度は六度に渉りて三全音と半音二箇との距離を有するものなり。例へば長六度音程は(ハ)(イ、ニ)(ロ短六度は(ホ)(ハ)の如し。

第百四十四問　長七度音程と短七度音程との別を問ふ。

答　長七度音程は七度に渉りて、五全音と半音一箇との距離を有するもの(ハ)(ロ、ヘ)(ホ)短七度音程は七度に渉りて四全音と半音二箇との距離を有するもの(ニ)(ハ、ロ)(ロ、イ)。

第百四十五問　完全八度音程とは如何なる音程なるか。

答　(ハ)より高音の(ハ)に至る間をいふ。

第百四十六問　三連全音とは如何なる音程なるか。

答　三連全音は第四度より第七度に至る音程の如き全音三箇よりなる増第四度をいふ。

第百四十七問　全音階的十四音程中完全の二字を冠する音程は何度か。

答　一度、四度、五度、八度の四あり。

第百四十八問　同上不及(減、不完全)の二字を冠するは何度音程か。

答　五度音程なり。

第百四十九問　半音階的音程とは如何なるものか。

答　半音階中に含有する音程は、すべて之を半音階的音程一名變化音程といふ。

第百五十問　半音階的音程はいくつあるか。

答　此音程は其數二十二あり、內十四音程は全音階的十四音程に等し。

第百五十一問　半音階的諸音程を命名すべし。

答　超過(増)一度(一半音階的半音を含有す)、減三度(二全音階的半音一半音階的半音を含有す)、不及(減)四度(一全音及び二全音を含有す)、超過(増)五度(三全音、一全音階的半音及び一半音を含有す)、増六度(四全音、一全音階的半音及び一半音を含有す)、減七度(四全音及び二全音階的半音を含有す)、不及(減)八度(四全音及び三全音階的半音を含有す)。

第百五十二問　超過一度音程と短二度音程との差異點如何。

答　超過一度音程は一度に渉りて、半音階的半音一箇の距離を有するもの、例へ

ば(ハ)(ハ)(♯b)(ト)の如く短二度音程は二度に渉りて半音一箇の距離を有するものなり。例へば(ホ)(ヘ)(ロ)(ハ)の如し。換言せば超過一度は半音階的半音即ち同名の半音程にして、短二度音程は全音階的なれば異名の半音程をいふ。

第百五十三問　増二度音程と短三度音程との別を問ふ。

答　増二度音程とは一全音と半音階的半音一箇との距離を有し(ハ)(ニ)(♯b)(ロ)、短三度音程は一全音と全音階的半音一箇とを有す(ホ)(ト)(イ)(ハ)。

第百五十四問　減三度音程を説明すべし。

答　三度に渉りて全音階的半音二箇の距離を有するものなり(ロ)(b二)。

第百五十五問　四度に渉りて一全音と全音階的半音二箇との距離を有するは何音程なるか。

答　不及(減)四度音程とす。

第百五十六問　超過(増)五度音程の例を示せ。

答　(ハ)より(ト♯)(ホb)に至る間をいふ。

第百五十七問　増六度音程と短七度音程との別を問ふ。

答　增六度音程は四全音と一全音階的半音及び一半音階的半音を含有し、短七度音程は四全音と半音二箇との距離を有す。例へば第一は(ハ)より(#イ、(bニ))より(ロ)の如く、第二は(ニ)より(ハ、ロ)より(イ)に至るが如し。

第百五十八問　減七度音程と不及(減)八度音程とを譜表上に記載せよ

答

(減七度)



(不及八度)



第百五十九問　(ハ)より(bホ)は何度音程なるか。

答　短三度音程なり。

第百六十問　(ロ)より(ハ)に至る音程と(變ト)より(ト)に至る音程を問ふ。

答　第一は全音階的半音程にして、第二は半音階的半音程とす。

第百六十一問　音程の轉回とは如何。

答　音程は之を形成する上下の二音中上音のみ靜止し、下音のみ八音上に轉移し、又は下音のみ靜止して其の上音のみ八音下に回らすを得る如き變化をなすことを得。此の變化を音程の轉回といふ。

第百六十二問　音程を轉回することによりて如何なる結果を生ずるか。

答　音程を轉回するときは長音程は短音程となり、短音程は長音程となり、增は減となり、減は增となり、超過は不及となり、不及は超過となる。然れども完全は矢張完全となり、決して變ずることなし。

第百六十三問　(1)第一度・(2)短第二度・(3)長第二度・(4)短第三度・(5)長第三度・(6)完全第四度・(7)增第四度・(8)減第五度・(9)完全第五度・(10)短第六度・(11)長第六度・(12)短第七度・(13)長第七度・(14)完全第八度等の轉回を問ふ。

答　(1)第八度・(2)長第七度・(3)短第七度・(4)長第六度・(5)短第六度・(6)完全第五度・(7)減第五度・(8)增第四度・(9)完全第四度・(10)長

第三度、(11)短第三度、(12)長第二度、(13)短第二度、(14)完全第一度。

第百六十四問　音聲の轉回を詳細なる圖にて示せ。

答

原音程	轉回音程	原音程	轉回音程
完全第一度	完全第八度	減第五度	増第四度
増第一度	減第八度	完全第五度	完全第四度
減第二度	増第七度	増第五度	減第四度
短第二度	長第七度	減第六度	増第三度
長第二度	短第七度	短第六度	長第三度
増第二度	減第七度	長第六度	短第三度
減第三度	増第六度	増第六度	減第三度
短第三度	長第六度	減第七度	増第二度
長第三度	短第六度	短第七度	長第二度
増第三度	減第六度	長第七度	短第二度
減第四度	増第五度	増第七度	減第二度
完全第四度	完全第五度	減第八度	増第一度
増第四度	減第五度	完全第八度	完全第一度

第百六十五問　和絃（コールド）とは如何。

答　和絃とは同時に響く數音の調和的結合をいふ。

往々三和音と和絃とを混同するものあれども、これは別物にして、三和音は和絃の一部たり、故に和絃中にこれ以

外のものありと知るべし。

第百六十六問　和聲とは如何。

答　和聲とは和絃を連ねて旋律に合せ奏するをいふ。

第百六十七問　單音唱歌と複音唱歌との別如何。

答　旋律のみを謡ふを單音唱歌といひ、二箇以上の旋律の重なりて進行するもの及び旋律に和聲を添へて謡ふものを複音唱歌（一名諸重音唱歌）といふ。而して複音唱歌中、旋律の他に一條の和聲を添ふるものを二重音唱歌といひ、旋律に二條の和聲を以てするものを三重音唱歌といひ、又旋律に添ふるに三條の和聲を以てするものを四重音唱歌といふ。但し同一の旋律を數人合唱するが如きは、元より複音唱歌といふ能はざるものとす。四重音唱歌にありては音符の四段中其の上段なる旋律は所謂高音部の唱ふべき部分にして、次の段は中音部、次の段は次中音部、下段は低音部の謡ふべき部とす。

第百六十八問　和絃と和聲との差異如何。

答　和絃と和聲とは部分と全體との關係にして、和絃は和聲の基礎となるものとす。卽ち和絃が數箇連續して一の和聲を形成するなり。

第百六十九問　和聲の必要なる理を說明せよ。

答　從來本邦の音樂は專ら單音的にのみ發達したりしを以て、和聲を添ふる複音唱歌の研究に至つては實に幼稚極りなきを遺憾とす。今日我が音樂の西洋樂に劣れる所以のもの、一に和聲の缺乏によるもの多し。而してこの和聲は果して音樂上發達的のものなるか、又は退步的のものたるかは古今の史上に徵して明かなる事實にして、和聲は實に音樂上進步的のものたるは、吾人の信じて疑はざる所とす。

第百七十問　三和音に幾種あるか。

答　(1)長三和音、(2)短三和音、(3)增三和音、(4)減三和音の四種とす。

第百七十一問　長三和音と減三和音との別。

答　長三和音は根音と第三音との間長三度にして、第三音と第五音との間短三度なる和絃をいひ、減三和音は根音と

第三音との間短三度にして、第三音と第五音との間亦短三度なる和絃をいふ。

第百七十二問　和絃の根音（ルート）、第八音（オクターブ）とは如何。

答　或音と其の上方第三度と第五度との三音を聯合したる和絃は、之を和聲的三和音といひ、略して單に三和音といふ。この三和音の第一音を根音といひ、根音の第八度を亦第八音と稱す。

第百七十三問　全備和音（コンプリート）とは如何。

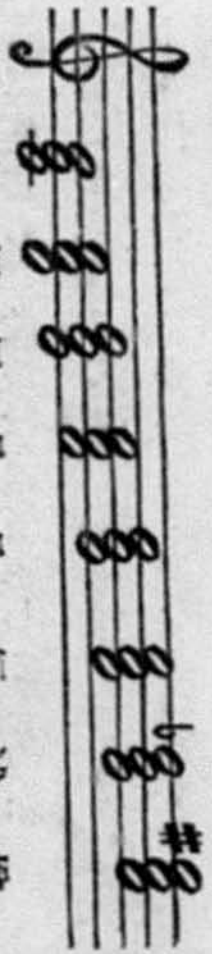
答　三和音に根音の第八音を加へたるものを全備和音といふ。

第百七十四問　普通（コンモン）和絃（コード）を說明すべし。

答　三和音の四種中和聲に最も多く使用するは、長短の兩三和音とす。故に此の兩三和音を通じて普通和絃と稱す。

第百七十五問　四種の三和音を高音部譜表上に記載せよ。

答



第百七十六問　轉調とは何ぞ。

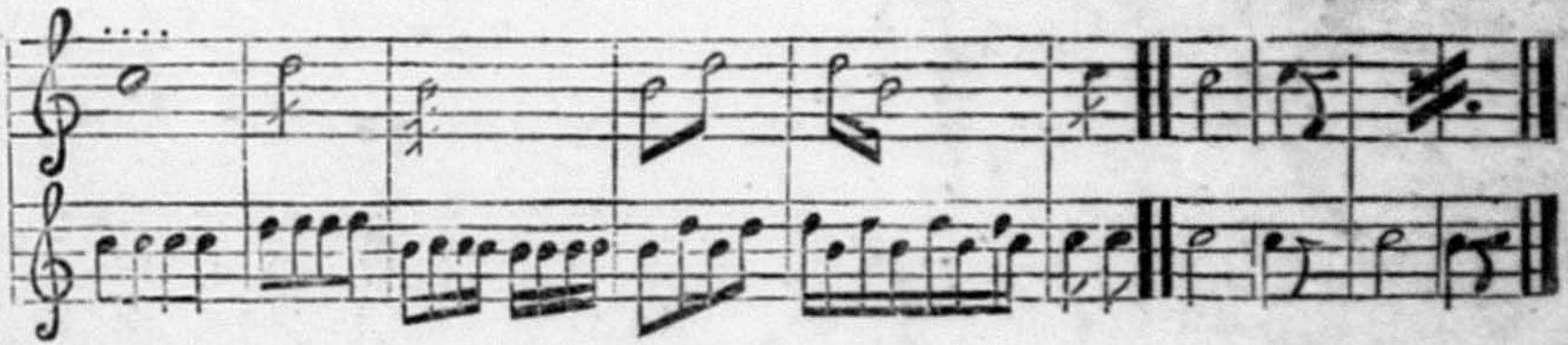
答　轉調とは其の旋律なると和絃連合上なるとに拘らず、進行中に於て樂曲の一部分だけ他の主調に轉ずるをいふ。而して之は吾人の鼓官に於て容易く認識することを得べしと雖も、樂譜上にありても臨時記號の出現によりて判知することを得るものなり。

第百七十七問　樂典（ミュジカルゲラムマー）とは如何。

答　諸種の記號によりて、音樂を物に書き表はしたるものを樂譜といふ。音樂に法則あるが故に樂譜にも法則あり。其等の法則を樂典といふ。

第百七十八問　樂典研究の範圍を問ふ。

答　音樂の理論としては、間接には音響學、心理學、審美學等必要なれども、直接入用なるものは樂典、旋律論、和聲學等なりとす。然れども樂典以外のものは專門家にあらざればさまで必要を認めず。されど樂典に至りては音樂上の法則を說明せるものにして、恰も國語に於ける文典の如きものなれば、初學者と雖も音樂の一班を窺はんとするも



は、是非心得置かざるべからざるものとす。而して樂典講究の範圍は、音樂一般の法則及び樂譜の組織を講ずるにあり。

第百七十九問　寫譜省略法とは如何例を擧げて說明せよ。

答　寫譜の勞を省かんがため、往々上圖下段の譜表に記載の通り、演奏すべきを上段の譜表に記載の如く記すことあり。